

07 期日：9月10日（金） 11：00／体育館

07発-3A-P15

幼児期における運動能力の発達と身体発育の影響

—走運動、ボール投げ、ドロップジャンプとの関係—

○重城 哲（日本大学）、雪吹 誠（目白大学）、佐藤 佑介、高橋 亮輔、服部 英恵、森長 正樹（日本大学）

幼児は、神経機能の発達は成人に近いが、筋肉や骨格などの発育が未熟であり、生理的にはとてもバランスの悪い状態であり、一般的に行われている体力・運動能力テストでは幼児の体力・運動能力レベルを評価することは困難である。そこで本研究は、遊びのなかの身体運動活動から幼児期の体力・運動能力を明らかにし、発育・発達レベルに合わせた運動指導の方法を検討することを目的とした。

身体運動活動は、走運動（10m折返し走）、投運動（ボール投げ）、跳躍運動（ドロップジャンプ）について、5歳児59名、6歳児59名、合計118名の測定を実施した。

走運動、投運動、跳運動の記録においては、いずれにも5歳児よりも6歳児の方が高い値を示す傾向がみられた。投動作では、ボール保持、体幹のひねり、支持脚の踏みだしをポイントとして5つの投動作のパターンがみられ、記録と発育段階により移行する傾向がみられたが、6歳児においては、記録の差がみられた。

これらの測定結果から、各運動能力と発育・発達状況の関係を検討し、幼児期の体力・運動能力の評価方法を検討する。なお本研究は、日本大学学術助成金の助成を受けたものである。

07 期日：9月10日（金） 11：00／体育館

07発-3A-P16

幼児の体力テスト評価における誕生月の影響に関する検討

○中野 貴博（名古屋学院大学）、春日 晃章（岐阜大学）、村瀬 智彦（愛知大学）

〔目的〕子ども達の体力テスト評価は一般に学年を区切りとして行う。しかし、近年の体力低下問題は幼少期にまで広がっており、評価時には発育の差に注意する必要がある。この時期の発育の差は誕生月の影響が主と考えられる。過去に幼児の体力を誕生月別に比較した研究も存在するが、近年では見られていない。本研究では現代の幼児のデータを用いて、誕生月による体力差の実情を検討し、体力評価の目安を提供することを目的とした。〔方法〕対象は652名の幼児。測定項目は、握力、体支持持続時間、長座位体前屈、ソフトボール投げ、25m走、立ち幅跳び、反復横跳び、両足連続跳び越し、捕球であった。誕生月を3ヶ月ごとに区切り、対象者を4群に分類した。群間の差を一元配置分散分析により検討した。多重比較にはBonferroni法を用いた。〔結果〕年少児は誕生月に6ヶ月以上、年中児は9ヶ月の差がある群間で多くの有意差が確認された。年長児で有意差が確認された組み合わせはわずかであった。これらのことから、幼児期の体力テスト評価には、年少、年中では概ね6か月区分が推奨されるが、年長では誕生月の影響はほとんど見られなくなることが示唆された。

07 期日：9月10日（金） 11：00／体育館

07発-3A-P17

発育発達期における体力・運動能力の加齢変化

—3歳から14歳までを対象として—

○春日 晃章（岐阜大学教育学部）、中野 貴博（名古屋学院大学）、村瀬 智彦（愛知大学）

〔目的〕子どもの体力低下が幼児期から既に発現していると言われていた今、まさに文科省発表の児童期以降の加齢変化だけでなく、同一テストを用いた3歳からの変化を体力・運動能力要素別に示す基礎資料が望まれる。本研究の目的は、3歳（年少）から14歳（中学3年）までの発育発達期において体力・運動能力がいかように加齢変化していくのかについて検討することであった。〔方法〕幼児期から中学生期までの加齢変化を検討するためには、同一テストを同じ測定方法で実施する必要がある。本研究では小学生と中学生に関してはH20文科省発表の立ち幅跳び、握力、長座位体前屈、50m走、ソフトボール投げ（中学生はハンドボール）および反復横跳びに関する年齢、性別の全国平均値を分析に用いた。幼児も同じテストを実施したが、50m走と反復横跳びに関してはテスト成就率を考慮して25m走と一本ライン反復横跳びを実施した。なお、測定した幼児は3歳児1270名、4歳児1617名、5歳児1571名の合計4458名であった。〔結果〕分析の結果、立ち幅跳び、長座位体前屈、ボール投げにおいて年長から小学校1年生にかけての伸びがやや停滞している傾向が見受けられた。